

教師と子ども



“The Teacher and The Child”

— Personal interaction in classroom —

McGraw-Hill Series in Education. 1956

一、教師・子ども間の人間関係

子どもは活動や経験を通して成長するものであるから、能力をもとにして定められたカリキュラムに従うことでは不十分である。よりよい人間関係を築く為には創造的考えや仕事をすすめることが必要とされる。しかし、経営者からの圧迫と教師の時間不足は、教師が精神衛生学を学び、それを教育過程にとり入れようとする気力を失わしてしまう場合が多い。種々な重荷を負わされている教師にとって、精神衛生学の原理、概念などの理論的なものよりも、具体的で実際的方法の方が価値があるであろう。子どもに接する際に多くの困難が伴うであろうが、教師にとっては子どもの成長の姿が慰めであり希望である。

環境の構成の仕方や子どもへの態度は、時と場合により異なるもので、一概には言えない。またそれらは教師のタイプや信念によっても影響される。

子どもとの関係において、子どもを知る最善の方法は、子ども自身の経験の知覚を通し

て子どもを知ることであり、子どもと教師との相互作用に直接に表わされている内なる世界を知ることである。感情を外界の対象の側に帰属させ、自分の感情と対象との融合を意識する感情移入が重要であろう。経験が同じでなかったとしても、教師が客観性と暖かい心で聞き、受容と信用の態度を持っていれば、その経験が子どもにどんな意義を持つかが理解出来る。子どもに接する時に、教師には客観性が必要とされるが、それは経験が子どもにとってどんな意義があるかを見る全く公平な態度を意味している。子どもの経験は、それ自身では十分であり、価値があるものであるから、それを子どもの前で評価したり、診断したりすることは、子どもに疑いを持たせ、妨げとなる。

子どもの経験した事実から、その行為の動機となる要素を説明することは難しい。子ども自身をよりよく理解する為に、教師が知るようにならなければならないのは、個人的な子どもの世界なのである。個人の接触において、その子どもを他の誰ともかけがえない

独特な人とみなし、個性や独自性を発見することが必要である。自分の経験について子どもが説明するのを無視したり、子どもに特別な意味を持つ経験を認めそこなうと、子どもの適応を歪めさせるかもしれない。もしも子どもが圧迫を強制されて、それに屈服する時には、自信と確信を崩壊してしまふ。自己を維持し高揚する必要は、個人に動機を与えらる。自己知覚・信念・態度・価値を脅かす試みに対しては、子どもは自分を守るのであろう。子どもは刺激が不十分な時には反応しないだろうし、強すぎる時にもショックを受けて全然反応出来ないことになる。外的圧力により行動するように個々に強制することは、成長しつづつある創造力と欲望を損うことになる。

認容は教師・子ども間の大切な関係を発展させる経験の中心のなものである。自分自身を認めている教師は、自分の態度・考え・価値・信念の根本原則に基づいて作用する。教師は、それらが価値あり、重要なものとみなすし、子どもとの関係において一貫した態度で自分を表現している。批判や評価の心配なしに、子どもに感情や理想を表現させるような、情緒的な雰囲気を作り出す。脅かされる子どもは、表面上は反応するし、成績判定や賞の為に行動している子は、自分の欲望に達成すべく内的には受け入れられない概念を採り入れたたりする。故に教師は子どもの思っている事が価値があるということを感じさせるようにせねばならない。出来るだけ子どもを受け容れねばならない。時々教師は、子どもの行為を拒否せざるを得なくなるが、その時には、子どもの感情は認めてやり、説明を加えたり、他の方法を与えるなりして拒否すれば、一般の認容の態度は伝達され得るのである。

かくして、非常に効果的に学力を促進する教育的立場は、学習者(子ども)への脅かしは最低であり、同時に子どもの特長が認められるような立場である。そのような雰囲気では、子どもは自分自身の興味や可能性に比較して、自分に役立つ材料・道具などを自由に使うことが出来るのである。教師は、子どもの立場で子どもに教え、社会化し、他人と同様に行動出来るように導びかねばならない。成長を通しての基本的状態として、すべての子どもは、愛・安全・依存・受容・尊敬などが必要である。周囲の人がこのような状態を保証すると、個人の可能性や個人の表現を通して成長が自然に起る。しかし、個人的関係において、子どもについての標準・社会的価値を強調しすぎることは、彼の可能的創造性・独自性を抑えることになる。

相互関係は、子どもが自己の独自性を認め・表現し・演じ・経験するのに自由であるようなものでなければならぬ。教師が子どもを本当に面倒をみてあげたいならば、個性を尊重し、子どもを制限なく受け容れてやるように努めるべきである。子どもをあるがままにし、なすがままにさせるのは、わがままを助成するのではなく、子ども人間としての存在を肯定するのである。

この書物に述べられていた事は、小学校と幼稚園の教師の研究会においての一年間の研究の結果まとめられたものである。研究開始

前に、各教師は心理学・教育学の理論や原理の研究に時間をあてた。一年間の研究期間には、週に三時間定期的に集まり、協議討論を重ねた。両親・他教師・校長・管理者らとの関係の困難さなどの個人的問題を提出し、グループ研究を行なった。どのグループにも校長がいたので、教員・校長の相互関係を通して教師に対する考え方が発展し、それまで困難とされていた柔軟なカリキュラム作成もできるようになった。

次第に教師は、子どもは創造的自発的な情緒表現を通して成長するのであると信ずるようになってきた。教師達は、特定のグループの子どもが教室内でこれらの経験を可能にするように試みた。これらの仕事は、子どもと教師間の相互関係が、より幸福に、より健康的に、有意義なものに到達する方向への動きを作ったのである。

二、子どもの情緒発達

家族員相互間、特に年少の子どもの生活で表現される情緒過程には種々な段階があり、

良い適応の子どもの情緒は、五段階で発達成長する。

問題児の情緒的発達をみると、それは家庭における不安や敵意に対する反応としてあらわれている。良い適応の子どもは、最初は信頼・受容・尊敬などの自己の態度に動機づけられるが、問題児は、最初に敵意や不安で動機づけられている。遊戯療法の個人的関係を通して、問題児は、情緒的成熟を得る機会や、情緒的経験の種々の段階の表現と説明を通して育つ機会を持つ。彼の問題と徴候は、彼の態度の反応である。これらの態度が変更されれば、子どもの問題や徴候はなくなる。遊戯療法において、問題児の動きのない負の態度は、成長に従い、よりはっきりした子どもに適切な、真の可能性と能力を表現出来る正と負の態度へと移る。

徐々にはあるが、遊戯療法の過程で、子どもの情緒過程が変化するのは明らかである。それは子どもの遊びの場面での治療関係中の情緒的行動において起る。それは自動的起るのではない。セラピストは、子どもの

感情・態度に熱心に反応し、子どもと、子どもの能力に親しみの感じを抱かせることが大切である。

三、幼稚園の子どもの情緒表現

幼稚園は、子どもの情緒発達を育てるよう教師が援助する機会を与え、子どもが自分を楽な気持ちで表現出来るようにするのを助ける機会を与える。

幼稚園には、強い束縛や制限がないから、教師は、自己経験範囲内で、計画を作ることが出来る。教師が子どもを理解する一方方法は、子ども達の情緒的表現を、注意深く聴くことである。

教師は、子どもを観察したり、子どもの感情・態度に反応したりする機会が、非常に多い。子どもが、遊戯室・砂場・積木の建物などで遊ぶのを、教師はグループの側で観察することが出来る。しかし、子どもは遊び友達や、遊びの内容を頻繁に変更するから、教師が子どもの特定の態度や情緒の型を続けて調査するには、困難な事が多い。

教師は、グループで一定の關係を持てる時
間を、定期的に設けることが出来る。次にあ
げられているのは、それを實際に行なった例
である。

A先生のクラスは、種々な家庭環境の子が
集まっている。A先生は子どもに次のような
説明を与えて話し合いを始めた。「この時間
はお友達と遊びながら話し合う時と同じよう
に、自分の思うことを自由に話す為に使って
いいのです。」教師は発言を記録した。最初は
日常生活の経験が多かったが、徐々に感情を
表現しはじめた。主に家族や友達に対する態
度や感情の表現であった。時間は各回十五分
〜二十分に限られた。だから毎回全員の子に
順番がまわることは出来なかった。時にはひ
とりの子どもが大部分の時間を使ってしま
うこともあった。しかし回を重ねるに従いこれ
は少なくなった。この試みは、すべての子ど
も、自分を表現したいという希望が動機と
なっている。

子ども達の話し合いは、種々の事に役立つ
た。その一部を列記する。

○おとなしく、ひっこみがちの子が、自分
の感情の発表を機会に、友達が出来た。

○彼女が表現したのは、妹に対する怒りの
感情であった。

○ボスの存在の子どもが友達と協力して遊
ぶようになった。

○グループにおける役割を確立した子ども
が多い。

○身体的攻撃が減少した。

○クラス全体の雰囲気が和やかになった。

その他数多くあるが省略する。

教師の役割は、全部の子どもが勇氣を持て
るようにし、自分の感情をはっきり表現出来
るように援助してあげ、熱心に興味を示して
あげることである。

この試みは、すべてが成功するわけではな
く、失敗もある。

(下妻小友幼稚園 福西百合)

幼児の教育 第六十卷第二号

二月号 © 定価 五十円

昭和三十六年一月二十五日印刷

昭和三十六年二月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真

発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします。